

『劍卷』をどうとらえるか―その歴史叙述方法への考察を中心に

内田康

はじめに

『劍卷』（『平家劍卷』（屋代本平家物語別冊）、『平家物語劍卷』（長祿本）などとも）は、単行の書物のほか、版本の『太平記』、また『源平盛衰記』の附録としても流通してきた。その一方、『平家物語』において内裏に伝来した「宝劍」の由来とその喪失を語る章段、さらに所謂「三種神器」と関わる神話的言説も、時に広い意味で「劍卷」と呼ばれたため、これらのテキストの呼称に混乱が生じたこともある。けれども『劍卷』が、『平家物語』とも密接な関係を持ったものであった点は、屋代本の別冊として伝わったこと、あるいは百二十句本の場合、やや形態を異にしながらも、第七句・第八句と、テキストの内部に組み込まれていること、また、彰考館蔵の長祿本や田中本をはじめとする単行諸本にも、内題に「平家物語」「平家」を冠しているものがあること等から、明らかだと言えよう⁽¹⁾。

では、『劍卷』と『平家』との関係は、どのように把握すればよいのだろうか。例えば屋代本との場合に限って見ると、巻十一の本文に「宝劍事」が記載されている点からも、この別冊は、本巻と相補的な関係にある拙書七ヶ条など

とは明らかに性格が異なっていることが知られる。卷十一の水没した内裏の「宝剣」に纏わる一件——以下、これを〈宝剣説話〉と呼ぶ——に関しては、屋代本の場合、竟一本系の本文とは開きがあり、「竟一系諸本周辺本文」と呼ばれる鎌倉本や平松家本などの記述にはほぼ等しいことから、一方系の影響を蒙っていない内容を留めたものと考えてよいと思われる。そして、この屋代本に、同じく内裏の「宝剣」と関わる内容を含んだ『劍卷』が重複するように付されている点については、単に本巻に対する異説として併せられたという以上の理由も考察されている。

①『平家物語』屋代本の場合、女の一生という形で物語の世界をまとめて反復し、全篇の結びとなる灌頂巻を持たない。成立当初からか、後の付加かともかく、劍の伝来という形をとって皇室と源家の歴史をふり返り、頼朝の勝利と、宝剣および安徳帝の入水を正当化した『劍卷』は、それなりに治承寿永の乱の一つの決算を示すべく、屋代本に添えられる理由はあったのである。

(松尾葦江)『劍卷』の意味するもの(一)七頁。傍線引用者。以下同じ)

本稿は、こうした従来の研究成果を踏まえつつ、この「異説」としての『劍卷』の性格を、『平家物語』をはじめとする幾つかのテキストとの比較を通して、特に歴史叙述上の方法的差異から確定していくことを目指すものである。順序としては、最初に『劍卷』に関する先行研究の検討から、そこで問題にされてきた成立論および一連の構想論を整理し、続いて『劍卷』の総体的構造を分析、さらに、『平家物語』やその他のテキストにおける「三種神器」神話との相違点を炙り出すことで、歴史叙述を行うに際して「刀劍伝承」という方法を採択した、この『劍卷』なる作品の特質を浮き彫りにできればと考える。

一 『劍卷』成立論をめぐって——先行研究その一

まず、『劍卷』の成立をめぐる研究が、『平家物語』の「秘事」との関わりから論じられていた経緯を確認しておく。『平家』語りにおいて、「劍」が「大秘事」の一つとされたことから、時に『劍卷』も「秘事」と関わるかの如く看做されることがあった。夙く山田孝雄氏は、『平家物語考』等の中で『劍卷』について、『平家物語奥秘』や『平家物語肝文』の「劍沙汰」と引き比べつつ、

①骨子は一致すれど、この方遙に増補せられたるを見るを以ていへば、單行本とするが爲に、平家物語中の劍の巻を増補したるものにして今は異類の書と曰するを妥當なりとすべきが如し。

(山田孝雄『平家物語考』(三)二一九頁)

②そも〱劍の巻とはもと平家本文中にあるべきものにして、(中略)然るに、之を秘事として別冊となしたりしよりして別途に發達して、三種の神器の一たる神劍の事のみならず古来の名劍の伝説及び、それに関連せる種々を附加し、遂に曾我の仇討の話までもとり入るゝに至りしものなれば内容はもとの劍の巻に比して数倍の多きに達せるのみならず、平家物語の本文とは矛盾する記事少からざれば、かく發達したる以上、別個の物語と見做すべき性質のものとなれるなり。

(同『平家物語異本の研究』(一)(二)一四—一五頁)

と、『平家物語』とは「異類の書と目するを妥當なり」とする一方で、『平家』の「劍」の章段の秘事化がこのテキストの成立を促したと推測している。同様の説が、翌年の珍書同好会本の解説や、昭和四年刊の岩波文庫旧版『平家物語』の序説でも示されていることから、この見解は一定の影響力を持ったかと思われ、例えば、戦前から戦中にかけての

『剣巻』に関する論考で特に注目すべき、高橋貞一氏「平家物語諸本の研究」および阪口玄章氏「平家物語の説話的考察」(ともに昭和一八年刊)でも、山田氏同様に「平家物語」から『剣巻』への発展、という理解がなされている。また、『剣巻』と類似した題名ながら内容的に別物の『平家物語補闕剣巻』も、奥書によれば、

③予朋友ニ檢校アリ。参会ノ時、談^{スル}ニ三種神器ノ事ニ及ヘリ。檢校云フ、三種神器ノ事ハ、平家物語ノ奥秘故ニ、本巻ニ欠テ、別紙ニアリ。予拝見ヲ望トモ不許。再三請^フ之シカハ、遂^ニ底ニアリ、出シテ見ス。
(黒田彰「内閣文庫蔵 平家物語補闕鏡巻、剣巻(影印、翻刻)」(5) 101頁)

と、『平家物語』の本巻の欠を補うテキストとして江戸時代にある檢校によって保管されていたといい、この点も山田氏が『剣巻』を考える場合に「秘事」と結びつけるヒントになったかと思われる。とはいえ、何より『剣巻』の場合、写本や版本等を通して広く享受されていたことからして、これを「秘事」とは違う角度から考察する必要性が出てくるのは、至極当然だったと言えよう。

戦後、『平家物語』の諸本研究で大きな成果の一つとなったのが渥美かをる氏「平家物語の基礎的研究」であることは論を俟たないが、本書は(宝剣説話)を含む広義の「剣巻」の扱いにおいても新しい局面を開くものとなった(6)。渥美氏は、『平家物語』の「剣」の章段の『剣巻』への発展を考えるのに、「秘事」との関わりを切り離れた上で、いくつかのポイントを示している。同書三〇三―三〇九頁から、その論点は次のように要約できる。

- a 「剣巻」の原形は四部合戦状態に見られ、それは『愚管抄』(巻五)を素材とする。
- b 屋代本・鎌倉本も四部本と同類である。
- c 「剣巻」は竟一本によってかなり増補されており、また上下二部に分かれた百二十句本も、大増補の産物である。
- d 当該説話は、四部本・屋代本の段階では敵島明神を女竜と見ることに付会された説話であったが、その他の諸本では、素盞鳥尊の八岐大蛇に付会された説話として首尾一貫させるための増補がなされている。
- e 屋代本別冊『剣巻』は、「源家宝剣物語」とでも称すべき物語の後半部に『平家物語』の「剣巻」を中心とする前後の記事を入れ込んで作られたものである。
- f 屋代本別冊『剣巻』と百二十句本「つるぎのまき」との関係は、屋代本別冊の方が古態で、百二十句本は、それにもとづいて編集されたものである。

中でも後の研究にとって重要な前提となったのは傍線部分、1・慈円の『愚管抄』との関わり、2・屋代本と四部本の原形性、3・「源家宝剣説話」の仮説、4・百二十句本の「剣巻」の後出性、といった問題だろう。このうち前二者は、『愚管抄』の記事が延慶本『平家物語』に基くという赤松俊秀氏の見解と相容れないものであり、昭和四〇年代以降の延慶本・四部本古態論争とも接点を持つ。本稿では古態論争には立ち入らないが、『愚管抄』に関しては次節で問題にする。また屋代本と四部本の関係についても、後ほど取り上げることにはしたい。それから後二者については、『平家物語』(宝剣説話)が、百二十句本を経て『平家剣巻』へと成長していったという従来の説を覆し、現在まで大方の支持を得ている考えだが、一方『剣巻』の成立にあたって「源家宝剣説話」というべき「原初の物語」があったかどうかについては、これも後であらためて問題にしよう。続いて次節では、これらの指摘を踏まえて展開された、『剣巻』構想論について見ていくことにする。

二 『剣巻』構想論の諸相―先行研究その二

さて、『平家』の〈宝剣説話〉や『剣巻』を包含した、広義の「剣巻」に対する考察は、そのメルクマールとなる渥美氏の研究を経て、特に昭和五〇年代以降、所謂「中世日本紀」概念の導入によって新たに捉え返され、一つの転換点を迎えた。特に、伊藤正義氏が提示した、『剣巻』は「平家物語の中で増補を繰り返した結果として生れて来たというようなものではなく、その部分をそっくり熱田系のテキストを借用した結果」による産物だ、との指摘は、きわめて重要である⁽⁷⁾。さらに阿部泰郎氏⁽⁸⁾、黒田彰氏⁽⁹⁾らの豊かな研究成果により、「剣巻」は、その広い意味において、中世に展開した「三種神器」に纏わる神話的叙述を支える中軸として理解されるようになった。そうした中で『剣巻』は、タイトルからして、恰も「剣巻」を代表する存在であるかのような印象をも与えている。実際、先にも触れたとおり、所謂「三種神器」と関わる内容を含め、『平家物語』本巻と『剣巻』との密接な関わりは明らかである。だが、もしも『平家物語』の枠組に囚われずに『剣巻』を読むならば、そこにはどんな世界が見えてくるだろうか。この地点から、「三種神器」説話を含めた『剣巻』を読み直すことで、様々な形で「三種神器」について語ろうとする広義の「剣巻」の中における、この作品の位置の確定も可能になるのではないか。この後の考察に先立ち、まずは以上の点を確認しておきたい。

それでは、我々はこのテキストに如何に向き合うべきか。これも昭和六〇年前後から、ちょうど阿部氏らの「中世日本紀」からのアプローチと並行するように、もう一つの流れとして、『剣巻』全体の構想に関する論考が提出されてくる。

①「剣巻」は、名剣の伝来をその軸に据えるという構想による、歴史物語の一種である。歴史の継承とか、伝統の

健在とかいうものは目に見えないがゆえに、剣という「物」の伝来のかたちが与えられた。名剣の由来(始原)と威徳を語ることは、王権の始原およびそれを支える武家の威光を語ることだった。宝剣喪失という一大事で開幕した中世にあって、歴史的アイデンティティを確かめる努力はさまざまになされている。武家による王権守護の象徴として宝剣喪失を納得しようとした「愚管抄」の理屈を、ストーリーに仕立てれば、すなわち「剣巻」ではないか。

(松尾菴江「『剣巻』の意味するもの」⁽¹⁰⁾七頁)

②頼朝の誕生を失われた宝剣に因縁の深い熱田社の由来において語り、宝剣と頼朝とを関連づけるところに、「剣巻」の意図がある。失われた宝剣に代わり、頼朝が朝家の固めとして現われたと語るのが「剣巻」であった。

(中略)「剣巻」は、この源家相伝の剣の物語の中で、平氏嫡流相伝の小鳥を登場させる。(中略)小鳥の伝承は、このように既に源家の刀として書きかえられるとともに、頼朝の代の寿祝に機能してゆくのであった。

「剣巻」とは、だから象徴的な物言いをすれば、「ネガティブな平家物語」だといえそうである。物語の構想が、どこかに「制度」としての頼朝を意識させることを考えあわせると、この「剣巻」は、『平家物語』の内側に語られた〈源家物語〉として、「ネガティブな平家物語」といえるのであった。

(生形貴重「『平家物語』の基層と構造―水の神と物語―」⁽¹¹⁾九四―九五頁)

ここで示されたポイントは、『剣巻』という作品が、「頼朝の勝利を寿ぎ、源家の威光の由来を、名剣の伝来に事寄せて語る、一種の歴史物語であること」及び「背景に、沈んだ内裏の「宝剣」に代わって武家が朝家を守護するという、『愚管抄』と同様の思想があること」の二点に集約されよう。このうちの一点目については、源氏に始まり源氏に終わるという物語の流れからして、おそらく間違いはない。特に生形氏の、これを「ネガティブな平家物語」とする理解は、即ち、「平家はなぜ、いかに滅んだか」を語るのが『平家物語』だとすれば、その反対に「源氏はなぜ、いかに勝利したか」を、重代の剣の数奇な運命を辿ることで説明したのが『剣巻』であった、と把握でき、魅力的な表現と言え

る。一方、渥美説とも関わる二点目に対しては、徐々に疑問が提示されるようになっていく。

③「劍卷」は天皇の存在を象徴する三種神器の由来・靈威・所在を明記し、殊に寿永乱の折に失われたとされる草薙劍の熱田社祭祀を強調し、新劍喪失、草薙劍現存という形で劍の喪失を理解している。その為「劍」の章段の如き帝運衰退否定を記す記事はなく、代わって草薙劍の現存を示す根拠となる熱田社関係記事の多量な挿入がみられるのである。「劍卷」草薙劍説話は、草薙劍を中心とした三種神器の敷衍と、その象徴する王権の敷衍とを主張するものと考えたい。
(多田圭子「中世軍記物語における刀劍説話について」⁽¹²⁾一四一頁)

④延慶本・盛衰記等は、(王権の物語)を構想し、「アマテラスの劍であった」・「偽の劍が沈んだ」という要素を持ち込んだ(これが無意識的な行為であろうとも)ために、不整合が存在するようになる。(王権の物語)という共同体的なコードによる抑圧の中で、硬直したイデオロギーは産出される。この(大きな物語)の抑圧により、延慶本等は歪みを発生させてしまうのではなからうか。
(高木信「平家物語・想像する語り」⁽¹³⁾二二七頁)

⑤安徳帝と共に海中に沈んだ宝劍について『愚管抄』の中で慈円が記したように、失われた宝劍のかわりに源氏が武の要として朝家の守りについたり解釈すると、「劍卷」は平家のその後を読み解くものであるといえよう。(中略)だが、『平家物語』と「劍卷」との間にはある断層が感じられる。これは「劍卷」の背後に控える世界が『平家物語』とは異なることに起因し、多分に『平家物語』と「劍卷」が成立した時代の違いを反映しているのではないだろうか。
(鶴巻由美「劍卷」の構想と三種神器譚⁽¹⁴⁾二二二―二四頁)

⑥「劍卷」の作者が「神皇正統記」等に影響されず、自身の考えで「本ノ劍」ではないと判断したとも考えられるが、そうなる「劍卷」が発想される根本が慈円の『愚管抄』にあるような宝劍の喪失とそれを補完する源家の威光にあるとする考えが揺らぐのではないだろうか。つまり、宝劍が現存するならば、武家の存在は天皇にとつて必要不可欠とはならず、この一言を入れることによって劍卷の構想自体が危うくなる可能性が大きい。それに

もかかわらず「本ノ劍ハ叶ハネバ、後ノ宝劍ヲ取持テ」と書いてしまうのは、三種神器は一つも欠けることなく今に受け継がれているのだ、という考えが世間に行き渡っており、それを疑うことは日本国の存在を危うくすると考えたからだと思われる。
(同右、二二二―二三三頁)

さて、その疑問点とは、『平家物語』の「劍」の章段つまり(宝劍説話)においては、寛一本や屋代本などの所謂語り本系諸本が、壇ノ浦に沈んだのを元の宝劍「草薙劍」だとしているのに対し、延慶本などの所謂読み本系諸本は、崇神天皇の時代に新鑄された劍が沈んだのであって、元の劍は熱田社に現存していると記しており⁽¹⁵⁾、「劍卷」もこれと同様の記述を持っていることから、『愚管抄』の記述との間には矛盾があり、熱田社の本劍の現存は『神皇正統記』等と同じく天皇の「王権の安泰」を意味するのではないか、というものである。この、『平家』において新旧二振りの「宝劍」のうちどちらが沈んだのか、という問題には稿者もかつて注目し、『平家』諸本は基本的に全て、内裏の「宝劍」を神代伝来の「草薙劍」として叙述する指向性を持ちながら、『日本書紀』に代表されるような「草薙劍」の熱田奉斎を記すブレクストの内容を無視できず、諸本生成の過程で叙述が分化するに至ったとの見解を提示したことがある⁽¹⁶⁾。その際『劍卷』に関しては、『平家』とは異なり「草薙劍」を内裏の「宝劍」としては描いていないという以上のことは述べなかつたが、この点を本稿で展開するにあたり、あらかじめ論点を先取りするなら、『劍卷』という作品は、新しい方の劍が失われたことをその眼目の一つとした構造になっているのではないか、というのが稿者の見解である。その意味するところは、後述に委ねたい。

以上、源頼朝の台頭と「草薙劍」の本劍の現存との並立が、『劍卷』に内包された矛盾として指摘されるまでの経緯を追いかけてきた。この問題に対して、近年新たな見解を提示したのがワイジャンティ・セリンジャー氏である。セリンジャー氏のみならず、例えばエリザベス・オイラー氏も、近著の第五章を、曾我兄弟に絡めるかたちで『劍卷』や幸若舞『劍讚嘆』の分析に割いており⁽¹⁷⁾、海外におけるこの作品への関心の度合いが覗える。

⑦慈円は実物の宝剣の紛失を嘆いたが、南北朝の知識人の中には偽物の宝剣が沈んだと断言する人も多くいた。南北朝時代に宝剣が現存するならば、慈円が想像した「宝剣の代わりとなる源氏」という構造はもはや通用しなくなる。本稿は『劔巻』に、宝剣と源氏を結びつける、新たな論理の誕生をみようとするものである。(中略)結論を先に述べれば、慈円が発想した「頼朝が宝剣の役割を果たすようになる」という換喩的な歴史意識が、『劔巻』において「頼朝が王朝の武力行使を完全に囲いこむ(内包する)」という提喩的な歴史意識に書き換えられる、ということである。(ワイジャンティ・セリンジャー「換喩から提喩へ」(15)一五七—一五八頁)

⑧劔説話における提喩の発生は歴史変化の中でも維持される物事の内質に焦点を当てることによって、武士を王朝の武力行使の歴史の中に据え、源平争乱後、朝家が武士に武力の権限を譲渡した物語を形成するのである。(同右、一七〇頁)

セリンジャー氏は、中島美弥子氏が『武家繁盛』に対して行なった、「征夷大将軍日本武尊の東征の物語が鎌倉殿頼朝の由来を説く物語と重ね合わされてくる。頼朝神話の前史に日本武尊神話が明確に位置づけられるのである」(19)という分析を『劔巻』に敷衍し、『愚管抄』や『平家物語』からこの作品に至るまでに、歴史意識のパラダイム・シフトが行なわれ、『劔巻』とは朝家から武士への武力の権限の譲渡を比喩的に表現した物語であると指摘した。この論考で注目すべきは、『劔巻』における頼朝の台頭を、従来言われてきたような『愚管抄』的「朝家の固め」としての役割ではなく、それ自体「朝廷から独立した」「武士の王権」の成立として位置づけた点だろう。この指摘により我々は、『劔巻』で頼朝に代表される源家の栄光を、失われた「宝剣」に替わるものとする『愚管抄』の解釈とは切り離して捉えることが可能となるのである。但し、氏の論考では熱田社とそこに現存する元の「草薙劔」を如何に捉えるかが、あまり示されていない。『劔巻』における熱田は、頼朝の誕生や「鬚切」の奉納など、源家の物語とも密接な関わりを持っているのみならず、先に少し触れた、「帝王ノ御宝」としての内裏の「宝剣」をどう捉えるかという問題も含め、『平家物語』

語』とも直接に関わる神代伝来の劔の物語との関係を解釈する上で、決して無視することのできない要素であるはずだ。セリンジャー論の意義を充分に受け止めつつ、氏が「換喩から提喩へ」と、それ自体きわめて比喩的に表現した歴史意識の転換を、さらに作品内容に即して検討してみたい。

三 『劔巻』の構造

以上、『劔巻』を広義の所謂「劔巻」の広がりの中で検討するに際し、先行研究を振り返りつつ考察のための糸口を探ってきた。続いて、本節で『劔巻』の構造を分析するにあたり、また別の先行研究を提示する。馬目泰宏氏は、一九九〇年代の五、六年間に集中して『劔巻』や観智院本『銘尽』等に関する研究を発表、そこには茨城大学附属図書館蔵で田中本と同系統に属する菅政友本『平家劔巻』の翻刻紹介などの成果も含まれる。『劔巻』の構造を考える上で、まず氏の『劔巻』構想論に目を向けてみたい。

①特に注意を引くのは、

- 1 霊劔は二振りある(霊劔A・B)。
 - 2 霊劔Aは、その周辺の説話によって命名され、かつ所持者の行動によって改名される。霊劔Bも、所持者の行動によって改名される。
 - 3 霊劔Aは、時間の経過を追ってそれにつまわる説話が配列される。
 - 4 霊劔Aは、めぐりめぐって本来の所持者の手に戻る。
- である。高橋(引用者注・高橋貞一)『平家物語諸本の研究』、四〇〇頁)が指摘したように、第二章で示した源氏宝刀説話との構成上の関連を思わせる。

作者の増幅構想に、この宝剣談の構成が取り入れられたことは、ほぼ確かであろう。

(馬目泰宏「平家剣巻考」序論—源氏宝刀説話の成立背景—)⁽²⁰⁾ (一九頁)

②筆者は、次の二点で渥美説を修正したい。

(1) 渥美説が「源家宝剣物語」を原点到置くのに対し、筆者は〈剣〉(熱田系説話)を原点到置く。そして、「源家宝剣物語」は、「平家剣巻」全体が創造されてゆく過程において、結果として生じたものである。

(2) (百二十句本)について、渥美説が、「源家宝剣物語」を、直接、〈つるぎのまき上〉の付随説話として取り入れたとするのに対し、筆者は、「平家剣巻」の複雑な構成を「宝剣」と「源家宝剣」とに分化、整理して成立したのが、(百二十句本)であり、「源家宝剣物語」はその整理の結果、より精練された形になったとする。

(同右「平家剣巻考その二—平家剣巻の成立—」)⁽²¹⁾ (一四頁)

馬目氏は、高橋貞一氏が『平家物語諸本の研究』で百二十句本の「剣巻」について、「上には寶劍、下には源家の寶刀藤丸・鬚切を比較し對照せしめ、此の寶刀を中核とする説話を排列した構想は自然的な表現であると言へよう」と述べたのを敷衍し、『剣巻』の源家重代と神代伝来という二種類の刀剣物語が、どちらも二振りの剣をめぐるパラレルな構成を有しており、かつ、前者が構想されるにあたって後者の〈宝剣説話〉がヒントになった可能性を提示した。さらにその統稿引用②において、渥美かをる氏の「剣巻」成立論に修正を施し、渥美氏の所謂「源家宝剣物語」は、「草薙剣」についての〈宝剣説話〉と別個にあつたものではなく、「平家剣巻」全体が創造されてゆく過程において、結果として生じたものである」と結論づける。「剣巻」の刀剣にまつわる説話が、中世における様々な刀剣伝承と重なり合いながら微妙なズレを見せている点は、これまでも多くの指摘があるが、この作品の場合、もしもただ単に当時の異説を集成しただけではなく、独自の説話統括原理に基いた編集を経ているとしたら、—もちろん、現在では失われた膨大な資料群のことを思えば、軽々に決めつけることは危険だとはいえ、それでもなお—その統括原理の存在した可能性を

探ることは、中世における「刀剣伝承と文学」のあり方の一齣の解明につながるのではないかと、稿者も考える。

このように馬目氏は『剣巻』の中の二つの物語における二振りの剣の並行関係に注目したが、稿者はそれに加えてもう一振り、途中でどちらもAの剣の分身として新たに作られる剣をCとし、それが作品中において如何なる意味を担っているのか、その動向にも留意して、各剣の継承過程を次頁【図1・「剣巻」の構造】のように整理してみた。

A・Bの二振りが二つの物語の中でもともにその生命を全うするのに対し、このプラス・ワンに当たる(第三の剣)Cは、いわば〈旧勢力〉と共に失われてしまうことを運命づけられているかの如くであり、先に「剣巻」という作品は、新しい方の剣が失われたことをその眼目の一つとした構造になっているのではないかと、この仮説を提示した所以である。海に沈んだ内裏の宝剣については言うまでもないけれども、もう一方の「小鳥」についても「夫ヨリシテソ小鳥ハ平家ノ宝トハ成ケル」と記され、その後のこの太刀の行方は不明であるが、物語の展開上、これを平家一門と運命を共にし、内裏の「宝剣」同様に海に沈んだと解釈することも充分可能だろう⁽²²⁾。「小鳥」が平家重代の太刀であったことは『平家』に、

③ 抑唐草ト云鑑也、小鳥ト云太刀ハ、当家嫡々相ト伝ハテ、惟盛マテハ九代ニ当ル。彼ノ鑑ト太刀ハ、新三位ノ中將ニ預タ置タリ。若シ代立チ直テ、平家ノ代ニ成事アラハ、終ニハ六代ニタベト申ヘシ (屋代本・巻十)⁽²³⁾

とあって、これはほぼ諸本共通の情報であり、また長門本巻第一や『源平盛衰記』巻四十などは、この太刀が桓武天皇の時代に八尺の鳥によって齎されたとの由緒まで記しているから、『平家物語』の享受者たちにとって常識の部類に属していたのは間違いない。その伝承が、「小鳥」はもともと源家の太刀であったと書き換えられた理由については、第二節引用②での生形貴重氏の指摘のように、源家による平氏討伐や頼朝の代の寿祝との関わりが推測されるが、さらにここで、「鬚切」を熱田大宮司に預け置くことを決意した頼朝の、「源氏重代ノ劍鬚切ヲ平家ニ取ラレン事コソ口惜ケ

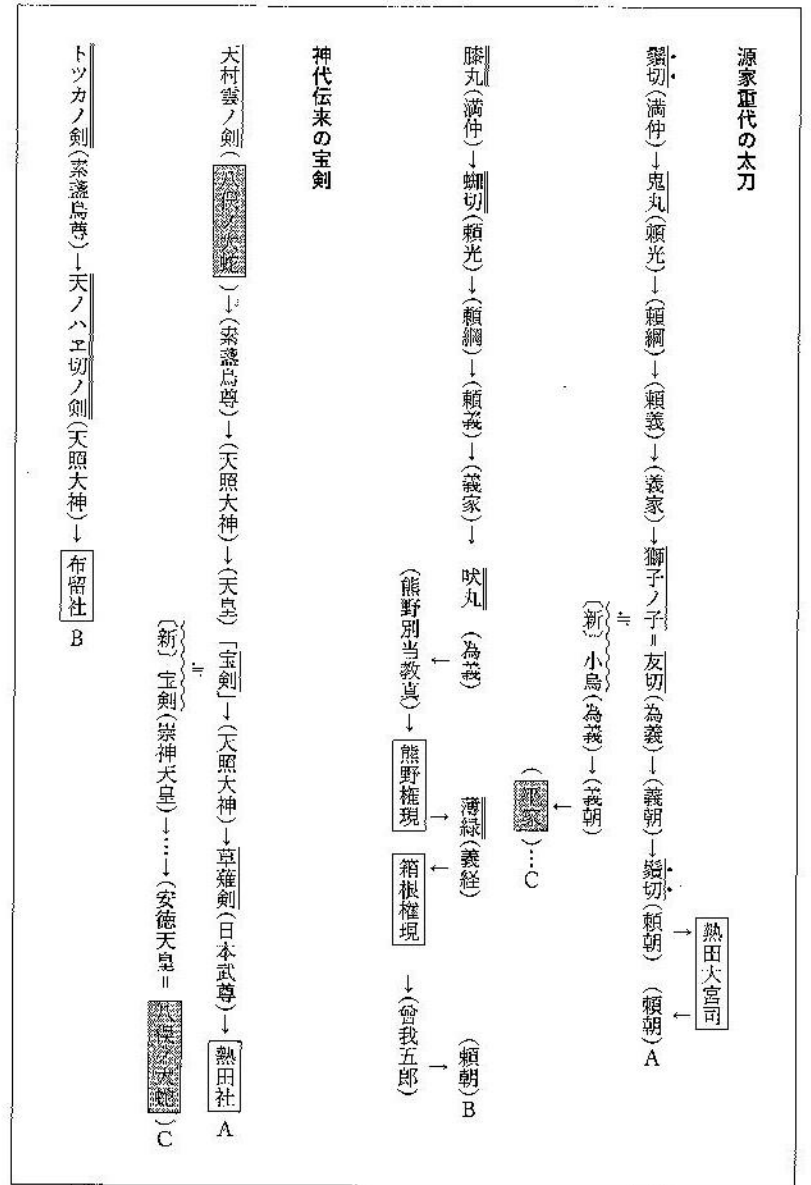


図1 『剣巻』の構造

る。レ」という述懐に注目するならば、「小鳥」は恰も「鬚切」の身代わりに平家に奪われた剣であるかのように見えてく

④ 『剣巻』が言うように、伊吹山の神がヤマタノオロチであり、奪われた草薙剣を取り戻そうとヤマタケルが草薙剣を佩いて来るのを待っているのであったとすれば、ヤマタケルはことさら草薙剣を置いてきて、奪い返される危険を避けた、との見方も可能である。あるいは、『剣巻』の作者は、それが剣を置いてきた理由であると読ませるように筋立てを考えたのかもしれない。

(多ヶ谷有子『王と英雄の剣 アーサー王・ペーオウルフ・ヤマタケル』(2) 八二頁)
⑤ 草薙の篇のモチーフが縮小版で源氏名剣篇の中に組み込まれ、かつこのモチーフが源氏名剣篇全体のテーマである源氏重代の剣が様々な流転しながらも最終的には源氏の嫡流(頼朝)に戻るといふ構造の中にすっぽり納まっているという意味で、『剣巻』の物語は変則的な入れ子構造をとっていると考えるだろう。(同右、一三八頁)

多ヶ谷有子氏は、『剣巻』の「草薙劍」説話に関して「ヤマタケルはことさら草薙剣を置いてきて、奪い返される危険を避けた、との見方も可能」との解釈を示す。もしこのように考えられるならば、このテキストにおいて八岐大蛇が「本ノ劍ハ叶ハネハ、後ノ宝劍ヲ取持テ都ノ外ニ出テ、西海ノ波ノ底ニソ沈ミケル」と書かれている、即ち、新しい宝劍が熱田に奉斎された元の宝劍の身代わりとなって大蛇に奪われるに至ったことが、「小鳥」と「鬚切」の運命にオーヴァラップしてくるし、『草薙劍』のある熱田社に預けられたという設定も、従来から指摘のある、頼朝と日本武尊との重ね合わせに加えて、刀剣の方も二重写しになるという効果が齎されるのではないか。多ヶ谷氏はまた、『剣巻』に見られる「変則的な入れ子構造」を指摘しているが、それを稿者なりに敷衍すれば、各篇のモチーフは二つの物語の間でかなり正確な対応関係にあり、これら互いに相似形を成すストーリー展開のうち、神代伝来の

「宝剣」の説話は、ストーリーの上では「源家重代の太刀」の物語に含みこまれていたものの、時代的により長いスパンを持つことで、太刀に纏わる一連の源家浮沈の歴史を、いわば神話的な原型として規定していると言える。なお、平家に「鬚切」の偽物が渡るといふモチーフは金刀比羅本『平治物語』などにも見え⁽²⁶⁾、こうした説の流通が「劍巻」と関わっているとも考えられる。だがいずれにせよ、「劍巻」なるテキストが、源家と朝家のそれぞれの剣に纏わる二つの物語の流れを、極めて意識的に対比構造化した作品であることは確かだろう。

そしてかかる構造化を施すにあたり、おそらく「劍巻」は、二系統の物語に擦り合わせを行なっているものと思われる。というのも、「劍巻」が成立したと見られる南北朝時代くらいまでの大方の説では、神代伝来の剣は三振り、そして源家重代の剣は「鬚切」一振り、というものが多かったからである。例えば、『平家物語』の〈宝剣説話〉の冒頭で語られるのは、百二十句本を除いて、読み本系・語り本系を問わず、どれも三振りの霊剣のことだった。これについては、黒田彰氏「源平盛衰記と中世日本紀―三種宝剣をめぐる―」において、『平家』諸本や「劍巻」、『平家物語補闕劍巻』をはじめとする資料を博搜した詳細な検討がなされている⁽²⁷⁾。その一方、『劍巻』に限らず、『平家物語』『平治物語』『太平記』『曾我物語』といった中世の軍記物語の改作や流通の背後に、特に南北朝時代以降流行した「刀剣伝書」の世界があることが、鈴木彰氏らの近年の研究で明らかになってきた⁽²⁸⁾。現存する数多くの刀剣伝書の中で、最も古い奥書を有するのは、応永三〇年(一四三三年)の観智院本「銘尽」で、さらに享徳元年(一四五二年)の『鍛冶名字考』がこれに次々とされる。以下、観智院本「銘尽」から引用してみる⁽²⁹⁾。

⑥銘盡

夫神代鍛号天村雲之鋺而人皇十代之御門崇神天皇御時被之兩日一神末子於大和國宇多郡被尊之以來代々御門之寶鋺是也其後八十一代御門安德天皇御宇元曆二年平家西國没落之時爲長門國團浦終沈海底訖其正本之鋺留宅熱田（云）社于今不絶在之（云）

（観智院本「銘盡」、9ウ）

⑦天國 平家ちう代のかからすといふ太刀のつくりなり

（同右、34才）

⑧助平 おなしき國住人 曾我五郎ときむねおやのかたきうつ時の太刀の作也

（同右、36才）

⑨諷誦 ひけきりお作

（同右「鋺作鍛冶前後不同」、41才）

⑩國宗 九郎判官うすミとりお作

（同右「鋺作鍛冶前後不同」、41ウ）

ここで確認しておきたいのは、日本各地各時代の鍛冶たちの名前を挙げるに際して、⑥のように、劍の起源とも言える神代伝来の「天村雲之鋺」について触れた後、熱田社における「正本」の存在を語るといふ、「劍巻」とも共通する発想が見られる点の一つ。そしてもう一つは、「劍巻」に名前が見える太刀が、どれも相互に無関係に記載されているという点である。さらに、例えば「薄緑」について、この名の太刀は、『源平盛衰記』卷二十一「小坪合戦事」では畠山重忠の太刀、また『平治物語』の金刀比羅本や流布本では頼朝の兄・朝長の太刀とされるなど、異説の存在はありふれたものだが、ここで「九郎判官うすミとり」と記されているという事は、かかる説が「劍巻」を離れても伝えられていたことを意味しており、以上の諸点から、先後関係の確定は困難なもの、こうした伝書が、或いは「劍巻」が整理される際の根拠となった可能性もあらうと考えられる。

稿者は先に、『劍巻』というテキストを眺めた場合、前半と後半とでそれぞれ中心的に語られる「源家重代の太刀」と「神代伝来の宝剣」という二つの物語の間には密接な対応関係があり、それは二振りプラス・ワンという形で構造化されているのではないかと述べた。この点は同様に源家重代の太刀について物語る『曾我物語』や幸若舞「劍讚嘆」での劍の相伝の流れと対比してみると、構成上の特質および神代伝来の「宝剣」をめぐる物語の果たしている機能が、より鮮明になると思われる。特に、仮名本「曾我」に見えるような太刀の靈驗説話の集積を、頼朝による覇権確立に至るまでの源家浮沈の歴史として一貫させるために、その神話的原型としての〈宝剣説話〉にも見合うような形で、「劍巻」が様々な操作を施している、という想定が可能なのだが、甚だ遺憾ながら、紙幅の関係上、ここでは太刀の継承過程を

【図2】ないし【図3】として掲げることとめ、詳細な検討は別の機会に委ねることとしたい⁽²⁹⁾。



図2 太山寺本『曾我物語』における源家重代の太刀



図3 幸若舞『剣讃嘆』における源家重代の太刀

四 「三種神器」神話としての『剣巻』の特異性

『剣巻』の後半(二巻本での下巻)で中心的に語られる「草薙剣」を焦点に据えた物語に関する研究は、本稿第二節で触れたように、伊藤正義氏をはじめとする「中世日本紀」概念の導入によって大きな転換を遂げた。『平家物語』へ宝剣説話と内容的に重なりつつも分量の多い『剣巻』の神代伝来の「草薙剣」の物語は、「熱田系のテキストを借用し、中心とした「三種神器」に関わる問題を検討していくことにする。

まず、『平家物語』へ宝剣説話の主要構成要素を大まかに示そう⁽³⁰⁾。

- A 神代以来の三靈剣のこと：百二十句本は『剣巻』と同様に二靈剣
- B 靈剣「天村雲剣」―素戔嗚尊の大蛇退治
- C 崇神朝の宝剣奉還(新鑄)：屋代本・百二十句本以外は剣の新鑄を記す
- D 日本武尊の東征―「草薙剣」の由来
- E 天智天皇七年の剣の盗難事件：語り本系では盗難後の本剣を内裏に返納する
- F 陽成院の狂気と宝剣の靈威：延慶本・長門本・南都本・寛一本のみが記す
- G 平家一門とともに宝剣水没

『平家』諸本の当該説話においては、分量的にも、また話素の数においても最も少ないのが四部合戦本で、屋代本がそれに次ぐ。先に第一節の後半で、渥美かをる氏が四部本を「剣巻」の原形と認定し、また屋代本も同類だと指摘したことを述べたが、確かにこの二つ(のみならず、屋代本と同内容の「寛一系諸本周辺本文」も含めて)は、畠倉徳次郎氏が『全注釈』で指摘した、読み本系と語り本系の二種類の(宝剣説話)の、それぞれの雛形を成しているかに見受けられる。というのも、単に分量が少ないというのみならず、四部本と屋代本は、Cでの崇神天皇の御宇の剣の新鑄記事

の有無と、Eで盗難に遭った「草薙剣」が最終的に内裏と熱田のどちらに納まるか、という二点だけが大きく異なっている以外は、ほとんど同一の内容を持っており、これは両本の古態性の根拠とはなりえないながら、「宝剣説話」の最大公約数的原態を指し示すものと推測されるためである³³。そしてこの差異は、「富倉氏が読み本系と語り本系の（宝剣説話）を区別する際に述べた、壇ノ浦に沈んだのが元の「草薙剣」だったか否か、という問題と直結するため、看過し難い。

さて、この差異が目された結果、『愚管抄』並びに『神皇正統記』等の歴史認識との近接性をめぐって巻き起こった議論については、すでに第二節で取り上げた。この問題に対し、稿者は次のように判断する。『愚管抄』において菟丸が、内裏の失われた「宝剣」に代わって武家が天皇を守護すると言った時、彼は、いわば（本物の）「宝剣」が沈んだと考えたはずだ。そして『平家物語』の立場は、読み本系と語り本系の違いを越え、また『源平盛衰記』や百二十句本まで含めて全て、内裏に置かれていた「宝剣」とは「草薙剣」だった、というものであって、『剣巻』とは異なり、失われた内裏の「宝剣」を神代伝来の霊剣と重ね合わせようという指向性が強い。その点では確かに菟丸の認識に近く、決して北畠親房のように、熱田の「草薙剣」の現存に注意を払うものではない、と。

では、「草薙剣」を内裏ではなく熱田の剣として語る『剣巻』の立場とは、どのように考えるべきか。果たしてそれは、『神皇正統記』と同様だとと言えるだろうか。

①神璽ト申ハ、神ノ印ト云文字ナリ。神ノ印ト申ハ、第六天ノ魔王ノ印也。イカナル子細ニテ、帝王ノ御宝ト成ケルヤラン、無覺束。是ヲ委ク尋ヌレハ、吾朝ノ起ヨリ天神七代ノ始メ、(中略)第六天魔王説話日本国ヲ始テ敝シ給シ時、注トテ印ヲシテ奉ラレケリ。今ノ神璽ト申ハ是也。 (『平家剣巻之下』³⁴、五三三〜五三七頁)

②次ニ宝剣ト申ハ、神代ヨリ伝リタル霊剣ニアリト見ヘタリ。天ノ村雲ノ劍、ハエ切ノ劍是也。天ノ村雲ノ劍ハ代々御門ノ御守、即宝剣是也。後ニ草薙ノ劍ト名付クハ、尾張国熱田社ニコメラレタリ。天ノハエ切ノ劍ハ、元ハトツカノ劍ト申シ、ガ、大蛇ヲ切テ後、天ノハエ切ノ劍ト名付ク。大蛇ノ名ヲハエト云故也。又ハヤロチト名付ク。彼劍、後ニハ大和国磯ノ上布ルノ社ニ籠ラレタリ。 (同右、五三七頁)

③手ナツチ（足ナツチ）ハ、姫ヲ助ラレ奉リタル事ヲ悦テ、尊ヲ智ニ取奉ケル時、マワリ三尺六寸ノ鏡ヲ引出物ニ奉ル。(中略)素盞鳥尊、姉御兄ト御中ノ不和ナル事ヲ思シテ、蛇ノ尾ヨリ取出シ給ケル天村雲ノ劍、并ニ天ノハエ切ノ劍、手ナツチ足ナツチカ(智ノ)引出物ニ奉タリケル鏡、已上三ツ天照大神ニ奉リ、不孝ヲ赦サレ給ヒケリ。天村雲ノ劍ハ人ノ代ニ伝テ、帝王ノ御守トナル。即宝剣是也。天ノハエ切ノ劍ハ、大和国磯上布留ノ社ニ籠メタリ。手ナツチカ(智ノ)引出物ノ鏡ト申ハ、今ノ内侍所是也。仁皇第四代ノ御門懿徳天皇ノ御時、(天ヨリ)三ノ鏡(雨レリ。其)ノ内ニ、(ハ)今ノ(智ノ)引出物ノ鏡ナリ。(中略)彼(智ノ)引出物ノ鏡ハ内侍所トテ、(御門ノ御守リニテ)内裏ニ御坐ス。

第十代ノ御門崇神天皇ノ御時、内殿ニハ恐アリトテ、別ニ殿ヲ作り、鏡ヲ鑄テ新キヲ御守トス。旧ヲハ天照大神ニ返進サセ給ケリ。鑄移シ給ヘル鏡モ、作替タル宝剣モ、靈験ニ(本ニハ)少モ不ニ劣給。

(同右、五三八―五四〇頁)

『剣巻』における所謂「三種神器」の内実を見ると、「神璽」は「八坂瓊曲玉」ではなくて、天照大神が、仏法を弘めないことを条件に第六天魔王から日本国を譲られた時に受けた「ヲシテ(手印)」であり、また「内侍所」も「八咫鏡」ではなく、素盞鳥尊が出雲で稲田姫を妻に迎えるに際して親の手摩乳から奉られた「引出物ノ鏡」であったとされている。そしてさらに注目すべきは、そもそも『剣巻』では、これら「帝王ノ御宝」が天皇の「御守」であるとはされていないものの、「三種神器」が天照大神から授けられたという記述がどこにも見られない点である。「内侍所」は懿徳天皇の時代に天から降った三面の鏡の一つであって、天孫降臨とは全く関わらないし、「神璽」についても、どうい子細で帝王の宝になったのか「ヲボツカナシ」というのだ。例えば『神皇正統記』で示されるように、もしも「三種神器」神

話の核心が「天孫降臨」を根拠とした天皇の地位の保証にあるとすれば、これは甚だ奇妙なことである。だが、伊藤正義氏が指摘された、『剣巻』と「熱田系のテキスト」との関係を考えると、その理由が見えてくる。伊藤氏の述べるように、『剣巻』においては、『宝剣』関係記事はもとより第六天魔王説話や「引出物ノ鏡」の説話まで、大部分「熱田の深秘」(『神祇官』)の内容と一致することからして、両者の深い関係は明らかだろう。だが、『熱田の深秘』は元来「三種神器」の語を一切載せず、また素盞鳥尊の「引出物ノ鏡」も「内侍所」と結びつくことはない。そもそも、『草薙剣』の由緒を熱田の縁起として語ろうとするテキストは、『熱田の深秘』ほか「尾張國熱田太神宮縁起」「熱田神明講式」から『寶剣御事』などに至るまで、天皇の宝としての「三種神器」について語ろうという指向性が希薄であった³³⁾。そうした「草薙剣」の物語が、『平家物語』や『太平記』等の軍記物語においては、内裏の「宝剣」の水没を語る(『宝剣説話』、ひいては「三種神器」神話へと織り上げ直されているのである。その点に関しては、確かに『剣巻』も同様だと考えてよい。しかしながら『剣巻』の場合は、鶴巻由美氏も第二節の引用⑤と⑥で指摘するように、失われた剣をオリジナルの「草薙剣」ではなかったとする点で、『平家物語』の指向性や『愚管抄』の内容と距離を見せている。けれどもそれは同時に、天皇への「神器」の伝授を語らない、という熱田縁起の要素を継承したことで、結果的に『神皇正統記』の言説ともズレを生じてしまった、と考えられるのである。

この様相を、『平家物語』諸本の中でテキスト内部に『剣巻』を組み込んでいる百二十句本の場合との比較を通して検討してみよう。百二十句本は、上下巻の順序は逆ながら、唯一「剣巻」と同様の内容を持つことが知られていたが、実は両者はそれ以外にも、看過し難い幾つかの相違点を持っている。まず、先に掲げた(『宝剣説話』)の構成要素で言えば「A、神代以来の三霊剣のこと」で、確かに百二十句本は、ここで『剣巻』と同じく二霊剣しか挙げていないのだが、『草薙剣』の所在地を、『剣巻』ではなく全ての『平家物語』諸本と同様に「内裡」としている。さらにCで、崇神天皇の時代に剣を新鑄したという、『平家』でも読み本系諸本や寛一本に見える記事が存在しない点は、屋代本や「寛一系諸本周辺本文」等と同様である。これは、百二十句本(『宝剣説話』)が、元来『剣巻』に基づいたものでありながら、その内容を『平家物語』の(梓組)に合わせて改変したためとしか考えられない。かかる例は、さらに以下の引用部分にも見て取れよう。

- ④彼劍ハ又天照太神ニマイラセラレ 御中直ラセ玉ヒケリ ソレヨリ代々傳リシヲ第十代ノ帝崇神天皇 同シ殿ニハ
 恐有リトテ 伊勢太神宮へ遷シ奉リ玉ニケリ(中略)天武天皇ノ御宇朱鳥元年ニ内裡ニ納奉リ玉ヒ 寶劍ト号ラル
 (百二十句本『平家物語』卷第十一「百七句 劍之卷之上」³⁶⁾六八二―六八四)
- ⑤カクテ天照太神岩戸ニ住ミセマシマセシ時 我カ子孫我ヲ見マホシク思ワン時ハ此ノ鏡ヲ見ヨトテ 神達ニ仰テ
 天ノ香久山ヨリ 鑛ヲ取リ 鑄玉ヒケレトモ 曇リテ悪シカリケレハ 末代ニハイカ、トテ 捨玉ヒヌ 今紀伊
 國ノ日前蔵ト申足也 次ニ鑄玉ヘルハ 床ヲ一ニメ御形ヲ有リ、ト鑄移サレケレハ 内侍所ト名付テ 御子ノ
 正哉吾勝早日天忍總耳尊ニ譲リ玉ヒケリ (同右、「百九句 鏡之沙汰」六九六―六九七頁)

こうした書き換えは、「三種神器」神話としての『剣巻』の特異性を逆照射する一方で、『平家物語』におけるその神話の呪縛力の強さをも垣間見せてくれるものでもあり、それは北畠親房とは正反対に、神代伝来の「草薙剣」の水没というかたちで歴史の構造化を図るという性格を持っていた。だがそのために、本稿が第三節で明らかにした、『剣巻』が本来的に持っていたはずの、源家と朝家それぞれの「二振りプラス・ワン」の剣の伝承による歴史叙述、という対応関係の構図は、ここでは完全に崩れてしまっている。まさに、『平家物語』と『剣巻』という、異なった歴史叙述の梓組の鬮ぎ合いの結果だと言えよう。

ところで、「三種神器」神話としての特異性というのは、『剣巻』だけに見られるものではなく、ある意味で、所謂「中世日本紀」として問題にされる諸テキストの全てが、それぞれの形でその特異性を示しているわけだが、本節では最後に、第一節でも触れた『平家物語補闕剣巻』に少しだけ言及しておきたい。黒田彰氏によって翻刻された内閣文庫

蔵本によれば、本作品は文正二年（一四六七）の本奥書を有し、『平家物語補闕鏡卷』と併せて一具で成立、伝来したもので、内容についても、同じく黒田氏により詳細な検討がなされている³⁷⁾。著者「藤原某」は識語において、「旧本平家物語」の作者・葉室時長の子孫を自称しており、「神道之奥秘」であるが故に世に流布する『平家』には欠けているところの、「神代三鏡劍并内侍所宝劍之本縁闕如」を補うべく、本書を著したという。これらのテキストが独自性を示すのは、例えば『補闕鏡卷』の次の箇所である。

⑥此皇孫ヲ以テ、代テ降ト欲トアリケレハ、天照太神ユルシテ、宝鏡（平鏡）、天兒（皇孫）屋命、太玉命等ヲナン悉ク皆相授テ給ケル。又、八咫鏡、草薙劍ノ二種ノ神宝ヲ、皇孫尊ニ授ケ賜ヒテ、永フルニ天璽トセヨ。豊葦原水穂國ハ是、吾子孫ノ可王ノ地ナリ。爾皇孫ト天降テ、平ケク安ラケク所知セ。宝祚ノ隆、天地ト無窮ヘケン。此鏡ハ、專ニ我御魂トシテ、吾前ヲ拝スルコトクスヘシ。
（『平家物語補闕鏡卷』九〇〜九二頁）

本書は『劍卷』とは大いに異なり、天孫降臨とその際の神宝授与の件りが比較的丁寧に、内閣文庫本で言えば二丁余りにわたって語られるのであるが、ここで皇孫に授けられるのは、「宝鏡」（＝「日御象之鏡」）、「八咫鏡」、「草薙劍」という三個の宝物なのであって、また「三種神器」とされるのは、「内侍所」（＝「日御象ノ新鏡」）、「神璽」（＝「八咫鏡」）、「宝劍」（＝「草薙劍ノウツシ」）という二面の鏡と一振りの劍であり、一世ニ伝テ、八坂瓊之曲玉ヲ神璽ト云ルハ、イカ、アラスル（『補闕鏡卷』）と、かかる（通説）は敢えて斥けられてさえいる。そしてこの書が、『神皇正統記』を見た上で書かれていることは、

⑦先帝ステニ三種神器ヲ、相クサセ給ヒケルユエニ、神璽鏡劍ナクテノ踐祚ノ初メ、違例ナレトモ、太上法皇（引用者注・後白河院）ハ國ノ本主ニテ、正統ノ位ヲ讓リ給ヒ、
（『平家物語補闕鏡卷』九三〜九四頁）

⑧先帝三種ノ神器ヲアヒグセサセ給シユヘニ、踐祚ノ初ノ違例ニ侍シカド、法皇ハ國ノ本主ニテ正統ノ位ヲ傳マシマス。
（『神皇正統記』³⁸⁾「後鳥羽」一五三頁）

といった文言の類似から明らかだろう。このように本作品は、「本縁」の（補闕）という方法によって、『劍卷』とは全く異なった形で『平家物語』的（宝劍説話）の（梓組）を否定する一方、北畠親房的な「三種神器」神話をも相対化しつつ、自らもう一つの「神器」の物語を紡ぐことで、「天津日嗣ノ万代マテ無窮コト」を言祝いで見せる。つまり、これら二種類の「劍卷」は、母胎として自らの書名にまでその名を冠している「平家物語」を、各々異なった形で逸脱しているわけだ。「三種神器」神話としての「劍卷」を考える際、複雑に絡み合った複数の語りの糸を丹念に辿っていくことが、今後求められよう。

おわりに

以上、論点が甚だ多岐に亘ったが、最後に本稿の趣旨を整理した上で若干の補足を施して全体のまとめとしたい。これまでよく中世における「三種神器」神話の一種としてとらえられてきた『劍卷』だが、本テキストは実は所謂「三種神器」の「天孫降臨」神話との結びつきが弱く、結果的に天皇への（王権神授説）は破綻している。その一方で、本書はその母胎となったであろう『平家物語』（宝劍説話）から、「神代伝来の二振りの劍プラス・ワン」の構造を抽出、特に、中心的な劍を模して新鑄された（第三の劍）が失われるという梓組を援用して神話的原型となし、これと対比的に、満仲の鑄させた源家の二振りの太刀が危難を経て頼朝にまで伝えられていく歴史叙述を、刀劍伝承の再構成によって織り上げるに至ったものと思われる。ここで留意されるのは、満仲の命を受けた唐国渡りの鉄細工が、太刀を鍛えるにあたって八幡大菩薩の靈告を得たり、朝家の「草薙劍」とパラレルな関係にある「鬚切」が、その「草薙劍」の祀ら

れた熱田を經由して頼朝の手に戻ったりと、源家の武威と神意との直接的な結びつきが殊更に強調されている点である。神代伝来の二振りの剣が再び天皇家には戻らなかつたのに対し、源家の二振りの太刀は、新たな「王権」の主権者となつた頼朝の元に戻される。その反面、身代わりとも言える二種類の(第三の剣)は、安徳天皇および平家ともども、おそらく同時に喪失の運命を迎える。すなわち「剣巻」とは、頼朝の栄光を失われた内裏の「宝剣」に替わるものとする『愚管抄』の解釈や、熱田社の「草薙剣」の現存を天皇の權威衰退の否定に結びつける『神皇正統記』の主張と似た、当為の王権の語りとは異なり、あくまでも実情としての「武士の王権」を草創した源家大將軍の由緒来歴を(39)、その背景に天皇家と関わる物語をも巧みに配しつつ、刀剣の相伝に事寄せて語るといふ、二重構造の(神話)であると考えられる。それでは再び、こうした叙述方法は『平家物語』といかに切り結ぶのか。具体的には、断絶平家型である屋代本や百二十句本に組み込まれた意味、また、同様に頼朝政権を言祝いで終わる延慶本との対比、そして、平家琵琶の語りにおける秘事化や、一方系などで時に「剣」が省かれたこととの相互関係など、あらためて問われることとなるが、これらを今後の課題としつつ、本稿はひとまずここで筆を擱くこととする。

注

- (1) 『劍巻』の諸本に因しては、松尾葦江「平家物語劍巻 解説」(完訳日本の古典45『平家物語』四(小学館、一九八七年三月)、同「劍巻」の意味するもの)、『日本古典文学会々報』一二二、一九八七年七月、および『平家物語大事典』(東京書籍、二〇一〇年)の「劍の巻」の項目(鈴木彰執筆)を参照。
- (2) 注1の松尾(一九八七年七月)に同じ。
- (3) 山田孝雄『平家物語考』(国定教科書共同販売所、一九一一年)。
- (4) 山田孝雄『平家物語原本の研究』(『典籍』一九一五年七月号。後に日本文学研究資料叢書『平家物語』(有精堂、一九六九年)に再録)。引用は日本文学研究資料叢書による。
- (5) 黒田彰「内閣文庫蔵 平家物語補綴巻、劍巻(影印、翻刻)」(『説林』四七号、一九九九年三月)。
- (6) 澤美かをる「平家物語の基礎的研究」(三省堂、一九六二年)。
- (7) 伊藤正義「熱田の深秘―中世日本私注―」(大阪市立大学文学部紀要「人文研究」三二―一九七九年)六九七頁。
- (8) 阿部泰郎「中世王権と中世日本紀―即位法と三種神器説をめぐりて―」(『日本文学』一九八五年五月)、同「日本紀と説話」(説話の講座3「説話の場―唱導・注釈―」勉誠社、一九九三年)、同「日本紀」という運動」(『解釈と鑑賞』至文堂、一九九九年三月)など。
- (9) 黒田彰『中世説話の文学史的環境』(和泉書院、一九八八年)、同『中世説話の文学史的環境 続』(和泉書院、一九九五年)、同『中世学問の世界と『太平記』―鬼切、ペーオウルフのことなど―』(『電記物語研究叢書8』『太平記の成立』汲古書院、一九九八年)など。
- (10) 注2に同じ。
- (11) 生形貴重『「平家物語」の基層と構造―水の神と物語―』(近代文芸出版、一九八四年)。なお本論の初出は『平家物語』の構想・試論―武器伝承と物語の構想・延慶本を中心にして―』(『日本文学』一九八三年二月)。また他に、佐伯真「源頼朝と軍記・説話・物語」(『平家物語溯源』若草書房、一九九六年。初出は一九九二年)も参照。
- (12) 多田圭子「中世軍記物語における刀剣説話について」(『国文目録』二八号、一九八八年一月)。
- (13) 高木信『平家物語・想像する語り』(森話社、二〇〇一年)。本論の初出は『平家物語』「劍巻」の(カタリ)―正統性の神話が崩壊するとき―』(『日本文学』一九九二年二月)。
- (14) 鶴巻出菜「劍巻」の構想と三種神器譚」(『國學院大学大学院紀要―文学研究科―』二五号、一九九四年二月)。
- (15) 富倉徳次郎『平家物語全注釈』下巻(一)(角川書店、一九六七年)五五五―五五七頁参照。
- (16) 拙稿「平家物語」(『宝剣説話』考―崇神朝改鑄記事の意味づけをめぐって―)、『説話文学研究』三〇号、一九九五年六月)。また同「劍巻」をめぐって」(『軍記と語り物』三五号、一九九九年三月)も参照。
- (17) Oyster, Elizabeth. *Swords, Oaths and Prophecy: Vision-Authoring Warrior Rule in Medieval Japan*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2006, pp. 115-137.

- (18) ワイジャンテイ・セリンジャー「換喩から提喩へ―『剣巻』における歴史の形象」(ハルオ・シラネ、藤井貞和、松井健児編『日本文学からの批評理論』笠間書院、二〇〇九年)。なお本論の初出は『國文學』(學燈社、二〇〇七年二月)。本稿での引用は笠間書院版に拠った。
- (19) 中島美弥子「武家繁盛」の將軍―日本武尊から源頼朝へ―(『平家物語の転生と再生』笠間書院、二〇〇三年)二二八頁。
- (20) 馬目泰宏「平家剣巻考」序論(『茨城キリスト教学園中学校高等学校紀要「新泉」』一六号、一九九二年七月)。
- (21) 馬目泰宏「平家剣巻考その二―平家剣巻の成立―」(『茨城キリスト教学園中学校高等学校紀要「新泉」』一八号、一九九四年七月)。
- (22) 明治時代に献上された、皇室御物の「小鳥」という太刀があるが、本稿はこれについては立ち入らない。注1の『平家物語大事典』の「小鳥」の項目(渡瀬淳子執筆)も参照。
- (23) 麻原美子・春田宣・松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語』三(新典社、一九九三年)一四二頁。
- (24) 多々谷有子『王と英雄の剣 アーサー王・ペーオウルフ・ヤマトタケル―古代中世文学にみる勲と志―』(北星堂、二〇〇八年)。
- (25) 日本古典文学大系31『保元物語 平治物語』(岩波書店、一九六一年)二七三頁。
- (26) 黒田彰「源平盛衰記と中世日本紀―三種宝剣をめぐって―」(『國語と國文學』一九九四年一月)。
- (27) 鈴木彰「源家重代の太刀「髭切」説について―その多様性と軍記物語再生の様相―」(『日本文学』二〇〇三年七月)、同「鍛冶名字考」所載の保元・平治の乱関連説について―中世刀剣伝書にみる『保元物語』『平治物語』の位相―(『古典遺産』五四号、二〇〇四年)、同「平家物語の展開と中世社会」(汲古書院、二〇〇六年)、同「源家重代の太刀と曾我兄弟・源頼朝―『曾我物語』の中の「髭切」「友切」―」(武久堅編『中世軍記の展望』和泉書院、二〇〇六年)、同「鬼丸・鬼切説の展開と『太平記』」(佐藤和彦編『中世の内乱と社会』東京堂出版、二〇〇七年)など参照。
- (28) 観智院本『銘盡』(複製本、便利堂、一九三九年)。
- (29) これについては、『剣巻』の構成原理に関する一試論―と題して別稿を予定している。
- (30) 伊藤正義「統・熱田の深秘―資料「神祇官」―」(大阪市立大学文学部紀要『人文研究』三四―四、一九八二年)。
- (31) 原克昭「源大夫説話」とその周辺―熱田をめぐる中世日本紀の一節―(『説話文学研究』三三二号、一九九七年六月)二二二頁。
- (32) 注16の拙稿を参照。
- (33) ここで言う「原態」の概念については小西甚二『平家物語』の原態と古態―本文批判と作品批評の接点―(平川祐弘、鶴田欣

也編『日本文学の特質』明治書院、一九九一年)参照。

(34) 本稿における『剣巻』の引用は、注23の屋代本別冊を基本に、注1の小学館版所収の長塚本の記述を、「」によって補った。

(35) 本文は「神道大系 熱田」(一九九〇年)に所収。但し『宝剣御事』は、熱田の縁起でありながら『平家物語』(『宝剣説話』)の枠組を取り込んでいるため、内裏の「宝剣」に対する言及が比較的多いものの、剣の水没は語られない。注16の拙稿(一九九九年)を参照。また、室町時代の成立かと考えられる『熱田大神宮秘密百録』(天文二年(一五四三)奥書)には、「三種神祇(神器)」に関する異説が例外的に記されている。

(36) 百二十句本は、斯道文庫本を汲古書院刊の影印版に拠って引用した。

(37) 黒田彰「平家物語補闕鏡巻、剣巻をめぐって―軍記物語と日本紀―」(『解釈と鑑賞』至文堂、一九九九年三月)参照。また以下の引用は注5に同じ。

(38) 日本古典文学大系87『神皇正統記 増鏡』(岩波書店、一九六五年)による。

(39) 頼朝を新たな「王権」の主権者として位置づける点に関しては、本郷和人『新・中世王権論』(新人物往来社、二〇〇四年)、同『武士から王へ―お上の物語』(ちくま新書、二〇〇七年)、同『天皇はなぜ生き残ったか』(新潮新書、二〇〇九年)ほかを参照。なお、本稿で用いた「実情」「当為」の語は、本郷(二〇〇七年)に基く。

序説 軍記物語古態論の行方

軍記物語の表現の古態を考えるとということ 佐倉由泰 3

I 屋代本平家物語の新研究

「屋代本平家物語」の書誌学的再検討 佐々木孝浩 25

屋代本平家物語卷十一の性格―字形と語句の観点から 吉田永弘 45

屋代本平家物語卷十一本文考 千明守 63

「平家物語」卷一「二代后」の本文―方系と八坂系の接近 伊藤悦子 83

屋島合戦記事の形成 松尾葦江 99

屋代本「平家物語」における梶原景時の讒言をめぐる 大谷貞徳 123

屋代本「平家物語」へ大原御幸の生成 原田敦史 139

II 刀剣伝承の文学

アーサー王のエクスカリバーと「剣の巻」 多ヶ谷有子 159

「剣巻」をどうとらえるか―その歴史叙述方法への考察を中心に 内田康 181

「平家剣巻」の構想―道行・生不動説話の位置づけをめぐる 山本岳史 211

III シンポジウム「平家物語研究の視点」

東国武士研究と軍記物語 野口実 231

歴史学の視点と文学研究の視点―「武士的価値観」を中心に 佐伯真一 243



ひつじ研究叢書〈文学編〉3
平家物語の多角的研究

原代本を拠点として

発行……………二〇一一年十一月九日 初版一刷

定価……………八、五〇〇円＋税

編者……………◎千明 守

発行者……………松本 功

印刷所……………三美印刷株式会社

製本所……………田中製本印刷株式会社

発行所……………株式会社ひつじ書房

〒一〇一〇〇一

東京都文京区千石二―一―二 大和ビル二階

Tel.03-5319-4916 Fax.03-5319-4917

郵便振替 00120-8-142852

toiawase@hitsuji.co.jp <http://www.hitsuji.co.jp>

ISBN978-4-89476-578-8

造本に充分注意してあります。装丁・印刷の美しさを保つため、
小社が寄附し、書店に販売しております。印刷・製本に
小社が寄附し、書店に販売しております。